

2016年12月に「石倉かご」を設置しました

ささエールうなぎ始動!



大地宅配では、うなぎの資源保護・回復を目的に、うなぎのお買い上げ代金のうち1点あたり50円を積み立てる「ささエールうなぎ基金」を2015年より開始しました。集まった基金は、うなぎの放流、川でうなぎのすみかになる「石倉かご」の設置に使用します。ここでは「石倉かご」のしくみと、昨年末に設置した石倉かごの状況についてご紹介します。

石倉かごの設置を通して、うなぎの資源を支え、日本の川の再生に役立つ、持続可能な取り組みを大地宅配は続けます。

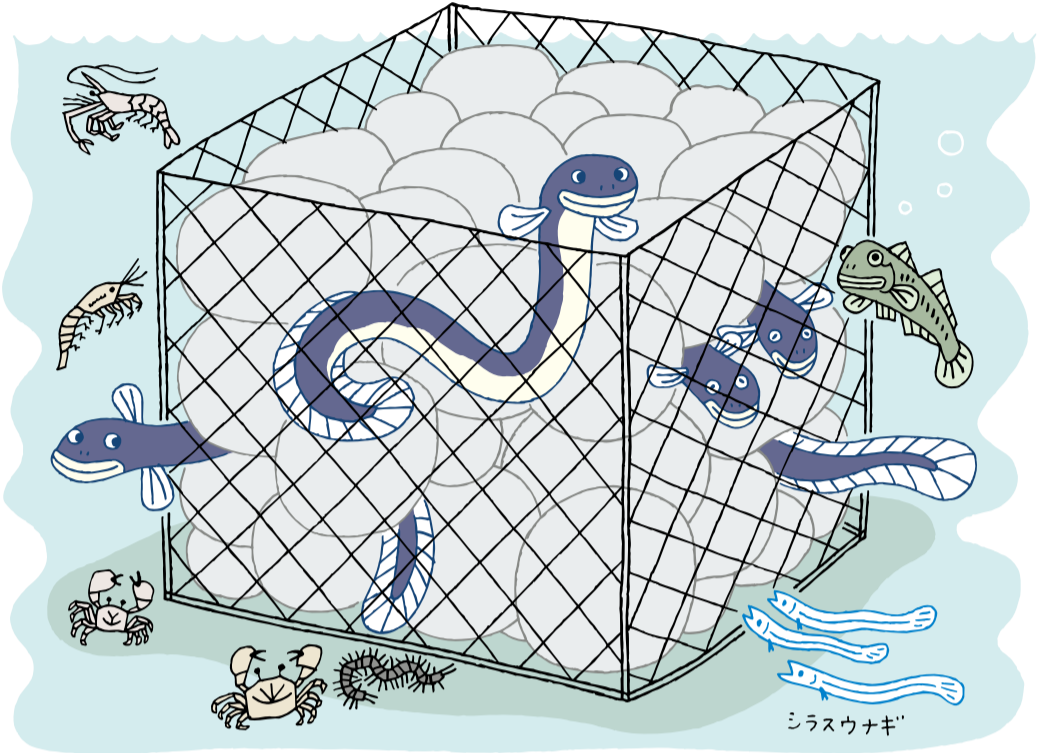
イラスト●小関俊一

石倉かごのしくみ

ワイヤーで作ったかごに石を入れて川に沈める「石倉かご」。川を遡ってきたうなぎの稚魚のすみかになるだけでなく、うなぎのエサとなる、カニやエビ、小魚も棲む、生き物たちの“ゆりかご”となります。護岸工事された河川にも有効で、川の再生に役立つと考えられています。石倉かごの設置は、大学だけでなく企業の参加もあり、徐々に全国に広がりつつあります。

うなぎの生態

日本の川で成長したうなぎは、遠く南のマリアナ諸島海域まで泳ぎ、産卵します。ふ化したうなぎの幼生(レプトセファルス)は、北赤道海流～黒潮に乗って進み、シラスウナギと呼ばれる稚魚になると、日本の川を目指して遡上します。そして、日本の川で産卵期になるまで長い年月を過ごし、また南へ産卵に向かうのです。



「ささエールうなぎ基金」活動報告

皆さんにご協力いただいた、「ささエールうなぎ基金」を利用し、九州大学・望岡典隆先生と「石倉かご」を設置してきました。「石倉かご」の設置は、今、うなぎ資源の回復に もっとも有効な手段として行政や大学、企業から注目されています。



最新のかごを用意しました

1 特殊なワイヤーで組まれた「石倉かご」。改良を重ねた特注品です。



2 後で「石倉かご」に棲みついたうなぎの稚魚や小さな生き物を捕獲調査するため、「石倉かご」の周囲を覆うネットを収納。



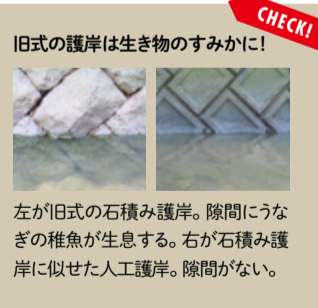
しっかり丸めて収納してね



3 組み上がった「石倉かご」。いよいよ川に沈めます。



4 沈める場所は、人工的に造られた石積み護岸の前。



CHECK! 旧式の護岸は生き物のすみかに!

左が旧式の石積み護岸。隙間にうなぎの稚魚が息をする。右が石積み護岸に似せた人工護岸。隙間がない。



これは腰にきますねー(泣)

5 バケツリレー方式で、かごにどんどん石を投入していく。



6 石を投入したら、フタをして完成! 果たしてうなぎの稚魚は棲みついてくれるのか?! 今ご期待。

水産担当・浅海が解説する
日本の川を守ること
うなぎの稚魚(シラスウナギ)は、2010年から大不漁が続き、4年前に、国際自然保護連合(IUCN)の「レッドリスト」生物の絶滅危惧種にニホンウナギが指定されました。
そこで大地宅配では、うなぎの資源保護について模索し、九州大学水産増殖研究室・望岡典隆教授の指導の元、うなぎを放流するだけでなく、日本の川を遡上する、うなぎの稚魚のすみかとなる「石倉かご」の設置がもっとも有効だという結論に辿り着きました。
「石倉かご」は、うなぎの稚魚のすみ

かになるだけでなく、河川護岸工事によって失われた、小さな生き物たちの「ゆりかご」として機能します。
昨年末には、「ささエールうなぎ基金」を利用し、福岡県須賀川に、九州大学と合同で「石倉かご」を一基設置。また、7月末には、設置した二基の生態調査と、新たな「石倉かご」を設置予定です。
今後は、全七基まで「石倉かご」を増やし、その有効性について調査、結果を共有しながら、全国へ「石倉かご」の普及を呼びかけていきます。
「ささエールうなぎ基金」は、うなぎの未来を守るために、ひいては日本の川の再生を目的にしています。皆さんのご理解、ご協力をお願いします。

日本の川の再生が
うなぎを支えます



浅海博志 ● 水産担当

大地宅配の水産担当歴20年。「もったいナイ魚」の開発など、“エシカルなお買い物”をテーマに、おいしく賢く魚を食べることを提案。全国各地での水産品の仕入れ他、料理人の経験を活かしたレシピ提案にも注力する。

※今年7月の「石倉かご」の調査結果は、『ツチオーネ』やホームページでご報告いたします。